

町民文芸



只見短歌会

一月詠草

大塚栄一

指導

古川 英子

大きな木のこぶしの蕾膨らみて凍てたる如き空に輝く

吉津 政枝

豪雪で有名となりしわが里の女世帯や老人気遣ふ

馬場 八智

雪近き小春日和に姑の忌の塔婆持ち墓地へと向ふ

目黒 富子

下校時に屋根より落ちし雪除き待たせおきたる子らを通しぬ

関谷登美子

未熟なる我が歌なれど楽しみて読むとふ賀状の添へ書き嬉し

渡部ゆき子

南相馬の人ら招きておんべ焼の謂れ説きつつ御供の餅焼く

五十嵐夏美

グループホームに一人の暮し決めし子の生活の様見極め置かむ

渡部ヨリ子

他町村で騒がれしといふ豪雪は我の町では例年のごと

新国 洋子

野良猫の小ささを抱き撫ぜをれば飼猫戸陰に中を窺ふ

(出 詠 順)

只見俳句会

二月例会

目黒十一

指導

又壺歩

朝空に虹立ちながら舞う粉雪

旧正月袖をまくりて練る蕎麦粉

一 灯

浜の子に堅雪わたり教えけり

修 一

大寒の欠席者なき区会かな

恒 夫

喉元に今日も落ちずの屋根の雪

牡丹雪宙に浮く子を抱えおり

吉 児

妙齢のほだ切る速さ雪祭

邦 男

下帯に飛雪粉々年男

水害の跡は未だに福寿草

隆 堂

春寒むや介護手摺のぬくもりに

邦 夫

風音もなく沈まりて雪積る

悴みし掌が干芋と語りをり

リウコ

初日の出部屋に入れむと結露拭く

冴返る流る真水のうまさかな

笑 羊

駅舎へ冬の花火のくぐもりて

康 女

薪としてくべる廢材春浅し

冬木立ふつと消えたる人の影

雪載せし車の並ぶ駐車場

初空や星の光のうすれつつ

洋 子

若水を母にさし出し手を添える

一 穂

梅林や頬桃色の少女いて

雪ぐつをはいて茶飲みも晴がいい

屋根の雪見上げているよ老夫婦

被災児の声ひびきあう雪あそび

礼

餅花のはじけて飛びぬ圍炉裏端

寒の入軒に寄りくる石叩

音立てて炉火一族をあたたむる

おじの居て炉語りつづく昔かな